

唐十郎血風録

唐十郎



文藝春秋

唐十郎血風録

唐十郎

唐十郎（から・じゅうろう）

昭和15年2月、東京・浅草生まれ。明治大学文学部卒業。38年、劇団状況劇場を結成。演劇活動をつづけるかたわら小説を執筆、53年に泉鏡花文学賞、58年、「佐川君からの手紙」で第88回芥川賞を受賞した。

唐十郎血風録（からじゅうろうけっふうろく）

昭和58年11月15日 第1刷

著 者 唐 十 郎

発行所 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 東京03(265)1211(代)

定 価 880円

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

唐十郎血風録・目次

第一章

金粉ショードンサーの頃　李礼仙とのベア・ブルー・シャーク
月世界チェーン巡業　阿佐谷の喧嘩　八戸で聴いた「オバQの歌」
伊東ハトヤ・ホテルの「混浴」

第二章

奇優ミトキン　嵐山光三郎との出会い　土の中に忘れた役者
第二回戸山ハイツ公演　ビットインの夜　ユニコンでの大喧嘩
新宿花園神社に登場　役者列伝　状況劇場のトレーニング

第三章

四谷シモンの登場　さらば花園神社　京都・東京同時公演
猫姫様　新宿中央公園事件　初めての留置場体験

第四章

日本列島南下興行　李礼仙のビザ　劇団天井桟敷との喧嘩
岸田戯曲賞受賞　村松友視との出会い　京都区役所での偽喧嘩
磨赤児・四谷シモンの退団　韓国公演への先乗り

第五章

東京・ソウル「二都物語」

金芝河との出会い

金芝河との再会

112

第六章

バングラデシュの乞食組合

パレスチナへ

虫の演出、鳥の演出

127

第七章

不忍池の妖鯨

「任侠外伝玄海灘」とピストル発射事件

148

ボタ山の風雨と闘った夜

転げ落ちた清川虹子

第八章

NHK大河ドラマに出稼ぎ

ハエ叩き座長

泉鏡花賞受賞

169

根津甚八の退団

虎穴に入ったブラジル公演

小林薫の退団

第九章

小説を書き始める

下谷万年町物語

「佐川君からの手紙」

芥川賞を受ける

187

あとがき

213

カバ―写真撮影 丸山洋平

血^{けっ}
風^{ふう}
録^{ろく}

唐^{から}
十^{じゅう}
郎^{ろう}



南阿佐谷の稽古場時代（前列左より唐十郎 李礼仙 後列左より不破万作
磨赤児 大久保鷹）

第一章

そもそもぼくが、アルバイトの金粉ショー・ダンサーとして諸国をめぐり歩いた当初は、ひとり旅でありました。踊りもできないのに単身、千葉の銚子の安キャバレーに売り飛ばされたときのことを思うと、強烈にぼくの記憶の中に残っているものは、まあ、ヌラリとした金粉の光りとサメの臭い^{にお}ね。

といいますのは、千葉の銚子の安キャバレーで踊っていると、これ確か初日でした。「タブー」の曲を踊って、そのクライマックスの、メロディーが高鳴り、一回転、二回転してポーズをとったときに、まあ客に漁師連中が多いんで、これが酒でちょっと悪酔いしたのか、踊りを見て悪酔いしたのかわからないけれど、ビールびんを投げ出した。ステージに向かって。踊ってるぼくに向かって。

一本は肩の上をビューと音を立てて飛んでくるし、舞台の背景がこう、映画館のスクリ

インのようになって、そこに当たったヤツは砕け散る。で、それをふんづけちゃった、ガラスを。右足の親指の付け根をグサリとやってしまった。

そのときに、なんていうか、こう膝から足元にヌマリとたれていく金粉とその血が一緒くたになったなと思いがちでも、やっぱり踊るのをやめるわけにはいかないから、少しびっこをひくのをうまくカバーしながら、一応ワン・ステージ終わるまでなんとか踊った。そして楽屋に足ひきずって戻ったときも、「お宅の店はどうでもない店だな、なんだ、あの客のバカ野郎どもは」というふうには怒らなかった。まあ、それは踊りが下手だったというひけ目もあって、怒りたいときにも怒れない。仕方がないから水道の蛇口で傷口を洗って、包帯のかわりに台所にあったふきんをひっちゃぶいて、指の付け根にぐるぐる巻いて、なんとかスリー・ステージをこなさなければならぬ。

スリー・ステージが終わって、病院へ行くにはもう夜も遅いし、もう一回ていねいに傷口の手当てをし終わったときに、一人の歌手がぼくを誘いに来た。その店のショーは、ぼくが踊った次に創価学会員の一人の女性歌手がうたうというふうな構成になってまして、その歌手がなかなかいい女だったんで、女目当ての客が、照れかくしにぼくも一緒に誘って飲みに行こうと言ってるらしい。

それはお招かれだからというんで、結局、治療に行くべき医者を酒に替え、酒が入れば入るほど傷は、ズキズキ、ズキズキ痛んでくる。

そのうち、やっぱり悔しくなつて、ビールびん投げた酔っぱらいがまだ店にいるんじゃないかと、ぼくは店にまた舞い戻った。舞い戻っても店は終わつていて、もうだれもない。そのときのキャバレーの中は、赤い非常用のライトがついてるものの、テーブルの上にイスが全部ここのせてあつて……ガラーンとしている中で、「この野郎ッ」て叫んだんだけれど、だれもぼくを迎え撃つわけじゃない。

それで店から浜辺に行つて、もう、むしゃくしゃしてる氣持をどう晴らしていいかわかんなくて星空を見ていたら、急になんか、異様なものの臭いが鼻をブンとついてきた。なんだろうと思ったら、向こうでは中華料理店に卸すのかどうかしらないけれど、サメの背びれ、サメの背びれがものすごい量干してあるんですね。そのひれの腐りかけの臭いがブーン、夜風に舞つて鼻をついてきた。

これが、臭くて美しくて悔しい思い出です。そして、そのフカヒレの影響をこうむつて、一緒に劇団をやつてた、ぼくの、つまり相棒である李^り礼仙^{れいせん}と、同じく金粉ショーでもつて旅したときにも、「ブルー・シャーク（青いサメ）」なんていうような芸名つけたんだよね。

しかしこの銚子行きは「淫劇 ジョン・シルバー」っていう芝居が終わつたあと、四十一年の春で、まあ特別出演のひとり旅。そのあとすぐに李とベアを組んだように思います。これも芸能プロダクションの采配でベアが出来たんじゃなくて、目黒に一人の舞踊の先生がおりまして、そこへ遊びに行つていたもんですから、そこで「ちょっと困つた、行つてく

れや」と頼まれちゃうわけだ。

これはもう初夏に近かったか、しかもひとり旅じゃなくて、ペアでスケジュールがたてこみ、小倉から広島をまわる。その名も「アメリカ帰りのブルー・シャーク！」

まず小倉の「月世界」からスタートで二十日間ばかりの契約で行ったわけなんですけれど、新幹線がまだなかったんだな、夜行列車で東京を発った。ところが寝台車の上段で寝てたもんだから暖房で風邪引いちゃって、九州の小倉に着いたら、旅疲れもくわわってフラフラしてました。

それで着いたその日の最初のステージ、ブルー・シャークの相棒である李を肩に乗けて、アダジオといってグルグルって回ってさぁと降ろして見せるところがあるんですがね、その場面でふらついて、そのままヘリコプター状にキリモミして客席のテーブルの、ビールびんやらなんやらが並んでるテーブルの上に、ドカーンと二人とも舞台から落っこった。その瞬間に、あ、これは東京へ帰されると思ったな。

この旅の前までは安キャバレー巡りだったけれども、小倉の月世界っていう店は、立派なA級！。ショータイムになると百何人いるホステスが、客といっしょにテーブルごと、ドドドドド……とステージに寄ってくる。そしてステージの目の前でヤンヤの喝采（かつさい）をあげながらショーを見ている。そこへ落っこっちゃったわけです。

で、まあ、これは帰されるなァと思ったんですけれど、舞踊の先生からただ一つ、弁解

の仕方を教わっていたんですよ。「旅疲れです、旅疲れです」って言えって。相棒の李はうまいけれど、ぼくはまあ、コケおどしの踊りでごまかしてやるようなもんだから、「あの片われはなんだ」といわれるのを、いつもビクビク、ビクビクしている。それが、旅疲れです、すみませんというのは努力がいるけれども、この際ともかくそれしかない。

けれどもこのときは、なぜか帰れといわれなかったんです。ところが、一難去ってまた一難、今度は引いていた風邪がひどくなってきた。四十度の熱が出たのは三日目でしたか。それでも四十度の熱のまま、舞台で同じようにアダジオのシーンを踊ったわけです。目の前はグラグラして、客の顔なんか見えないし、それから音楽だって幻聴のように聞こえる。そしていまでもよく覚えてることは、自分の気管支の音が、その音ばかりが音楽のように鳴っていた——。ぼくはそのとき、これは途中でぶっ倒れるかなと思ってただけけれど、一応ステージをこなしました。

小倉は一週間で終えて広島に向かい、そういう月世界チェーンを転々として、約一カ月して東京へ戻ってきたとき、旅のいろんなことを振り返って、つくづく因果な商売だと思ったね。

一回のステージは「タブー」三分半と、「ブラジル」が三分の、合せて計六分。それが一晩に三ステージある。つまり、二回の休みを入れた六ラウンドを闘うボクサーみたいなものです。踊りがうまければまだしも、踊れないぼくは、あの手この手でやるから特別に疲

れる。ステップもハコ(リズム)を踏まないしね。やはり下手だと見破られちゃまずいと思うんで、舞台をかけずりまわるわけですから、終わったらやっぱり犬のように舌を出してる。それも唇についた金粉を舐めないようにね。

金粉ショーの金粉のことを話しますと、ばくも分析したことはないけれども、錫の粉だと思っています。それを天ぶら油でコップに溶かして、塗って踊ったあとに流れ落ちる量を計算しながら、ベアの二人でたがいに塗り合う。儉約しながらやると、二人分の量はコップに半分ぐらいだな。塗るのは手でなく刷毛で塗ります。油は持ちあるかないで、店についたらばキッチンへ入って行って、「すいません、油ください、揚げものの」って。新しいサラの油じゃだめで、一回揚げものしたあとの、キツネ色になった油、それが一番、錫が溶けやすい。

丸坊主にしてるようなダンサーは、頭まで塗っちゃうから、遣う量は増えるでしょう。髪の毛がある者はそのまま、つまり金色の、なんていうか、こう、ターバンみたいなのを頭にまいたりするわけです。腰布もあるし。顔は目鼻立ちが見えないともう、なんだかわかんないから、眉毛は一応舞台ショー風に描いて、目尻もこうつり上げて描いて、髭も描いたりして、成吉思汗みたいな髪にしたりして効果的に作り、それからいいねに、からだを塗るわけです。

九州小倉、広島をまわって東京へ帰ってきてから、長旅がちょっとつらくなってきた。

このブルー・シャークの旅のため、この年の春は思うように芝居をやっていません。それで金粉ショーは都内というか、東京周辺に決めてもらおうと思った。

というのは、ぼくは芝居がやはり目的であって、何も金粉ショーが商売じゃないし、それで稽古場買えるカネを稼ぐために金粉ショーダンサーになったということです。都内を中心にやらしてくれというふうに頼んだんです。そして、赤羽から、錦糸町、草加から、いろんなところへ行きました。

思いだすのは、赤羽の安キャバレーで踊ったことです。「タブー」のメロディーが、一番高鳴るところで一回転してポーズをとるときに、ドンとシコのように足を踏みみならず。そのときに、ステージのうしろにあった棚のひらき戸がふわりと開いて、二百個ばかりのトイレットペーパーが、ドドドドドドドと落っこってきた。

それが、あまりにもおかしいんで、ホステスが、赤羽のいかかわしいホステスどもが、やんやの喝采で大喜びした。それに味しめて、ツー・ステージ目も同じように、こうやって回転して、ドンとシコを踏んだらば、ボーイが棚の戸を押さえて、ニヤツと笑い、「そうはいかない」って言うんです。

なんか芝居がかった夜でおもしろかったけれど、このときにもうひとつ思い出があります。

赤羽ですから、帰りは終電車になんとか間にあう。からだの金粉を落とすために風呂へ

行くけれど、それを省略すれば何とか間にあう。そこで楽屋でタオルで金粉を少しこすりおとし、トランクに荷物を詰めこんで、松明の棒で弥次喜多みたいにかついでかけだせば終電に乗れる、とこのときも李と一緒にかけた。全速力でかけだして、なんとか終電車に飛び乗った。

車中、顔についてる金粉が気になり、うつむき加減で上野駅までやってきたときかな、駅につく直前でした。電車がすいてたんで、トランクと松明を目の前に置いていたんだけど、それを、車内を通りぬける酔っぱらいの中年男が、なにも踏まなくてもいいのにわざと蹴倒して、その上をドカドカッと踏んで、スーッと逃げていったんです。

そのときに、あまりにも突然の無礼をはたらかれてボーッとしてたから、気拔けたような状態で、何秒かぼんやりしていた。そのあとで、「しまった」と思った。

「この野郎！」というべきところを言いそこねてボーッとしてしまったっていうことで、これは一生涯、しまった、しまったと思う人生踏むんじゃないかと、黙示録的にチーンときました。

で、急に、やにわに席を立ち、車内をかけずりまわってそいつをつかまえようと思ったら、電車はすでに上野駅に着いており、中年男はドアの向こうへ去ったあと。構内のどこを歩いているのかさっぱりわからなくて、ホームを走りながら、すごいやアな、なんというか挫折感というか、砂を噛むようなにがさをかみしめながら、上野駅からぼくのア